

# 先住民の〈今様〉を追って —在伯特別研究中間報告—

青 柳 寛\*

1. 研究活動の概略と進展状況
2. 主な参加行事と出来事
3. ブラジリア大学における活動
4. 結びに代えて

参照文献

参照URL

## 1. 研究活動の概略と進展状況

ここに示す研究活動は、2018年4月1日から2019年3月31日までの365日をオフィシャルな研究期間として筆者が本学より承認を得た在伯特別研究派遣に関するものである。これに備えて3月29日



画像0 ブラジリアのシンボルとなるテレビ塔（Torre de TV de Brasilia）から望んだブラジリア中心部（Central）とこれを取り巻くサバンナの遠景。画像の奥には人工のパラノア湖も見える。

---

\* 国士舘大学 21世紀アジア学部 教授

に現地入りした筆者は、ブラジリア大学人類学部 (Departamento de Antropologia da Universidade de Brasília [UnB-DAN]) のステイーヴン・ベインズ教授及びブラジリア連邦教育局 (Secretaria de Estado de Educação [SEDF]) に所属 (当時) のヨーコ・ニタハラ=ソウザ研究員に迎えられ、研究活動とそのための方の設定を開始した (画像1-1)。

滞在先となったブラジリアはブラジル中央に広がる標高約1,100mのサバンナ高原地帯に開かれた人口が約200万人の新興都市で、リオ・デ・ジャネイロに置かれていた首都が1960年に遷都されるに当たって整備された連邦直轄地区である。時の大統領ジュセリーノ・クビチェック (1902-76) の指揮下で建築家のルシオ・コスタ (1902-98) が都市設計を手がけ、パラノア湖 (Lago Paranoá) と称される人造湖の畔に飛行機が翼を広げた形式 (Plano Piloto) で都市の中核部分が構築された。機首に見立てた部分には国会議事堂と各省庁のビルが並び、翼に見立てた部分には各国の大使館と高層住宅が軒を並べている (画像0)。国会議事堂 (Congresso Nacional) やメトロポリタン大聖堂 (Catedral Metropolitana de Brasília) と称されるカトリック教会、そして国立博物館 (Museu Nacional Honestino Guimarães) など、白色をベースとしたモダンな建築も都市の中央部分に点在し、これらはいずれもリオ・デ・ジャネイロ出身の建築家オスカー・ニーマイヤー (1907-2012) が手がけたものである。そして1987年、こうしたユニークな都構えが国際連合の教育科学機関 (United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization [UNESCO]) に評価され、世界遺産にも登録された。

ここで筆者は、初めの約二ヶ月半をコリーナ (Colina) と呼ばれるブラジリア大学の寮で他の派遣研究員や大学院に通うルームメイトたちと過ごし、その後は市内に賃貸アパート (condomínio) の一室を得て活動に従事した (画像1-2)。ポルトガル語は話せないが、学生時に習得した片言のスペイン語で日常会話の方はスルーし、専門的なコミュニケーションは世話人役を担ってくださった件のお二人より多大な協力を得ながら実践した。

当初筆者が想定していた研究課題は『グローバルなネイティヴ・セルフスタイリングの現状考

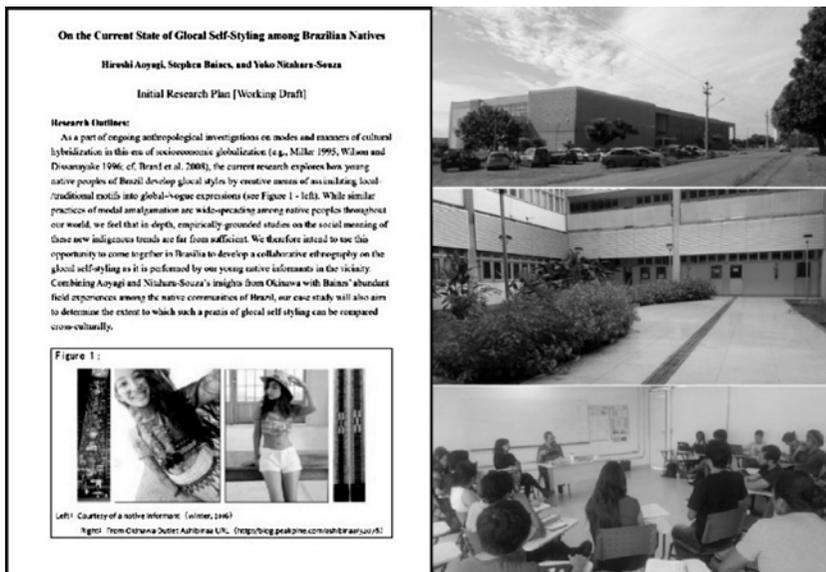


画像1-1 ブラジリア上空から初めて望んだサバンナ中の街景色 (左) と、筆者の到着を歓迎してくださったベインズ、ニタハラ=ソウザ両先生 (右)。



画像1-2 初めの二ヶ月半を過ごしたキャンパス寮（コリーナ）とルームメイトたち（上三枚）；街中のW 3 地区に借りた閑静なコンドミニオとご近所の風景（下三枚）。

寮』とタイトルを付した、主に若手の先住民たちによる「ネオエスニック」な装身に関する現地調査だった（画像1-3）。新千年紀以降、フェイスブックなどソーシャルメディアの著しい発達に伴って「セルフィー」と呼ばれるネット上での「今様」な自己表示法が世界規模で流行し、民族色を強調するモチーフに洋風のトレンドリーなアウトフィットを融合させた装身で自撮りした若手先住民たちの画像がネット上にアップされ、プロフィールやアルバムを彩った。今やこうしたネオエスニック＝「新進の民族性」を表象した創作自画像はSNSをショーケースに象徴競争（symbolic



画像1-3 筆者が提出したリサーチプロポーザル（左）と、ブラジリア大学人類学部の校舎及び講義風景（右側の三枚）。

competition) を展開する勢いを呈しており、ブラジルではこれを模した非先住民系ブラジリアン (Branços) の若者たちも多く出現してインスタ栄えたりしている。沖縄で長らく同様のネオエスニックな自己表現とこれに寄生しこれを推進する地域のブランド産業に取材を重ねてきた筆者は、北米の大学で文化人類学を専攻していた学生時以来憧れ続けてきたブラジル先住民の生き様に「直触れたい!」という個人的な動機も加わって、沖縄との事情比較を念頭に渡伯を決意した。ネオエスニックなファッションとそのブランド化を図る文化産業の発展経緯についてはコマロフ夫妻 (2009) による民族誌的な探究が既になされているが、大手の先住民系企業の経営戦略に偏ったその「上から目線」な調査報告に筆者は飽き足らず、庶民の日常により密着した今回の現地調査プロジェクトを思い立った次第である。

ところが、いざ現地入りしてフィールドワークに着手し、既に連絡をとっていたインフォーマントを含む先住民の当事者たちに取材を重ねていく内に、事態は「若手インディオたちによるハイブリッドな自己表現」と当初想定したようなポップレベルの一辺倒な解釈では割り切れない、政治的な複雑性を孕んでいることに気づかされた。それはあたかも、「アフリカの近代」を「グローバル化に伴うモノカルチャルなシステムと地域特有の諸文化が交錯する過程」として捉え、「複数のモダニティー (polymorphous modernity)」といった粹な専門用語を提唱しながら、地域に根差した慣習や宗教儀礼や口承伝承を国家を媒介した資本主義やワールドシステムの影響へと一辺倒にこじつけるコマロフ夫妻 (1993) の分析のスタンスが、ハッティンソン (1996) らの鋭い批判に曝されたような感触だった：ポストコロニアルな現場の政治的で泥臭い人間関係を前に、自分が机上で描いてきたエスノセントリックでロマンティックな構想が打ち破られた苦い現状理解に他ならなかったのだ。一見して華やかでクリエイティヴな若手ブラジル先住民たちのネオエスニックなファッションも、その動機や根拠を問い質していく内に次第に明らかになってきたのは、自分たちが否応なく組み込まれていくグローバル規模のモノカルチャル・マトリックスに対して自分たちの民族性をどこまでも主張し、先住民としての威信をかけて抗おうとする真剣な態度だった。そしてまた、直面する伝統喪失の危機に対し、生身を以て自民族の記憶を維持させていこうともがく彼/女らの、叫びにも似た姿勢であった。

地域の部族共同体が置かれた政治的な状況や、そこに生きるメンバーたちに共有される歴史的な認識にまで踏み込んだ見識をこうして余儀なくされた筆者は、より古典的な民族誌に立ち戻る気分で事例研究プロジェクトを再考し、在伯の先住民調査を実施するに当たって欠かすことのできない申請先である国立先住民保護財団 (Fundação Nacional do Índio [FUNAI]) の関係者に助言を求めたり、先住民コミュニティの代表者たちとの直接的な入境許可の交渉を進めたりした。結果、提出期限を念頭に本稿を執筆している2018年11月現在までにグアラニー、ヤワラピティ、カヤポ、トゥカノ、ラクラノ、及びカインガングの六部族を代表する総計41名のインフォーマントたちとの対話を実施できた他、近年新たに文明世界と接触した某部族集団を含む三つの部族共同体への取材を取りつけることができた。そしてこれらのコミュニティ中三ヶ所において既にフィールドワークを実施した (画像14)。また、親しく交わったラクラノ族のメンバーからは「よく働く者」を意



画像1-4 フィールドワークの実施風景：サンタ=カタリーナ州に先住民族村を訪ねた筆者（左上）；ヤワラピティ族の少女と（右上）；カヤボ族の伯母たちと（左下）；ベインズ教授と共にインディオ雑貨を吟味（右下）。

味するザンダン（Zagdan）という名を授かり、光栄に思っている。

ここで一つ特記しておくべきは、調査に掛かるコスト＝人件費ならぬ「人権費」に関する体験談である：非先住民研究者たちの間である意味常識化した「インディオたちとのつき合い方」として、キーパーソンとその家族への謝礼（金銭に限られない）の持参は勿論のこと、現地の案内に掛かる費用は全てこちらが支給するという暗黙の了解がある。筆者の場合、派遣に当たって支給された研究費の既に三割強が謝礼（食材や教材、そして衣類や寝具を含む現地への調達物資）と案内費（聖地などの主要なスポットへの移動に掛かる経費や移動中の食費、そして場合によっては宿泊費を含む）、あるいは入境を控えて夜通し受けることとなった浄化儀礼に注がれた。加えて、残していくよう求められるがまま、現地に持参した自分の所持品を地元の人々に配ることも屢々あった。先住民が関わる調査には、莫大な出費を覚悟する必要があるのだ。

## 2. 主な参加行事と出来事

### 2.1 先住民の日

上記のような研究活動の概要とこれまでの経過の大筋を踏まえた上で、筆者にとって現地調査を大きく進展させる契機になり得たいくつかのイベント体験や出来事について述べておきたい。

まず、例年4月19日はディア・ド・インディオ（Dia do Índio）と呼ばれる「先住民を称える日」で、ブラジルでは各地で先住民のための集会やデモが行われる（画像2-1-1）。多くの学校では非先住民の学生たちがインディオの衣装を身に纏ったり、インディオについて学ぶために博物館や資料



画像2-1-1 先住民の日(左)とこれに次ぐテラ・リヴレ(右)への参加を呼びかけるチラシ(インフォーマント提供)。

館を訪れたりするが、ブラジル入りを果たして間もない筆者は、この日に際して催された各種のイベントに参加するチャンスに恵まれた。

ブラジル国内には現在「インディオ」として認知されている部族集団が220程あり、混血や曖昧なアイデンティフィケーションを理由に国から認定されていない「エトノジェゼ (etnogese)」と呼ばれる集団もある。ブラジリア連邦直轄地区では例年、これら全てを含む広義的な意味での先住民グループの内の約120部族のメンバーたちが一堂に会する大集会が催され、メイン会場となる先住民記念館 (Memorial dos Povos Indígenas) 脇の公園広場はこの4月19日以降十日間に渡って大規模なテント村と化す。このテント村広場には市場も設けられ、内外から人々が集って活気に満たされ、実に様々なインディオグッズが生活用品と共にそこで売買されるのである (画像2-1-2)。居ながらにしてブラジル全土の先住民と接触できるこの類稀な行事への参与は、いうまでもなく筆者のフィールドワークの扉を大きく開いてくれた。

「先住民の日」とこれに次ぐ「テラ・リヴレ (Terra Livre)」と称される先住民土地解放運動週間はしかし、単にお祭り騒ぎをして先住民の存在を内外に印象づけるに留まるものではない。この間にテント村から約4キロ離れた司法宮 (Palácio da Justiça) では、先住民を代表するリーダーの面々と法務省関係者たちの間で先住民の権利 (主に地権と人権、そして知的財産権) に関わる交渉が執り行われ、ビル外では激しいデモが繰り広げられる。テラ・リヴレはこの4キロの道程を先住民が一同に大行進し、司法宮で裁判官に権利保障を要請するデモンストレーションをクライマックスに終了する (画像2-1-3)。そしてデモの直後にはその年度の共同声明が発表されるのである。<sup>1</sup>ま

1 2018年度のテラ・リヴレ共同声明の具体的な内容については先住民全国運動公式のURL (Mobilização Nacional Indígena [MNI], <https://mobilizacao nacionalindigena.wordpress.com/2018/04/26/documento-final-do-acampamento-terra-livre-2018-o-nosso-clamor-contra-o-genocidio-dos-nossos-povos/>) を参照のこと。また、プログラムの全貌はブラジル先住民民族連盟 (Articulação dos Povos Indígenas do Brasil [APIB]) の関連URL (<http://apib.info/2018/04/12/programacao-do-acampamento-terra-livre-2018/>) に詳しい。



画像2-1-2 先住民の日を祝い、これに次ぐテラ・リヴレ集会に合わせて全国から集ったインディオの人々で賑わうテント村（ブラジリア都心の先住民記念会館前広場）の風景と、テラ・リヴレを代表するカヤボ族のラオーニ大酋長に学部の仲間と拝謁した折の一枚（右下）。

た、テラ・リヴレの開催中には大学や国立博物館（Museu Nacional Honestino Guimarães）でもこれに呼応した一連のイベントが催され、筆者はこの間に関連のシンポジウムや研究会、そして展示や上映会を思う存分味わうことができた。

この一連のビッグイベントを目の当たりにすることで、ブラジルにおける先住民の政治的な立場や政府との関係について改めて現状認識を得ることができた。デモ参加者へのインタビューや声明内容から見てきたのは、長年に渡る行政課題が現在でも達成されていないという事実だった：先住民保護区の制定は今でも満足になされておらず、以前合意があったにも関わらず制定の手続きが滞ったまま放置されている土地も沢山ある。これらを直ちに保護区として再認定して手続きを進めさせ、これを官報に明記することを先住民たちは訴えていた。合わせて各所で未だ多発して止まらない行政的な差別やヘイトクライムに対する懲罰を制定し、入植者たちとの抗争で不法に先住民を検挙したり、話し合いと合意がないまま先住民の土地を開墾したりすることを止めるよう、再三に渡って要請していたのである。



画像2-1-3 2018年度テラ・リヴレにおける大行進の様子：2000名以上の先住民と、これに寄り添う人権活動家や労働者のサポーターたちが、ブラジリアの都市中央通り沿いに先住民記念館から司法官までの約4キロの道程を行進し、先住民の権利保障に関する要請書を裁判官に手渡した。司法官に隣接する国会ビルの前では軍事警察の機動隊がバリケードを張り、警戒態勢を敷いていた（右下）。

筆者が長年現地調査を行ってきた沖縄でもそうだが、大地と共に先祖代々素朴に暮らしてきた土地を突如入植者に奪われた挙句、絶え間のない抑圧の下に据え置かれ、執拗な差別を受け続ける人々の「魂の叫び」はとても痛々しく伝わってくる。そしてここブラジルで今も裸一貫の暮らしを続けるインディオの人々の「不屈の精神」に改めて敬意を表したくなる。「文明人」の視点からすれば「未開な」インディオたちも、その多くは「未開」であることにむしろ「民族の誇り」を抱いているというのが実情だ。弓矢を手に国会前を行進し、法相に直訴すべく司法官に押しかける彼/女らを前に、筆者は内心「Quem são os selvagens aqui? Eles ou nós?! (野蛮なのはどちら様の方なのか?!)」と問い続けざるを得なかった。

## 2.2 物産展

ディア・ド・インディオの一端となる記念行事ながらも、テラ・リヴレとは一線を画する形式で催されたイベントの中に、4月19日から5月20日にかけて国立博物館で行われた『ヤワラピティ写

真展 (Yawalapiti : Entre Tempos)』があった (画像2-2-1)。ヤワラピティはブラジル北部のアマゾン地域を拠点とする部族のひとつで、アマゾンの熱帯雨林に流れるシンゲー川の上流域を代表する人々である。「代表する」とはいえ、1950年代の半ばには絶滅の危機に瀕した部族で、2010年以降も人口総数は未だ200に満ちていない。

この写真展は、フランス出身でブラジリア在住の写真家ジョアン・ボエルズが部族メンバーの日常生活に密着取材した成果を「部落の構成」、「共同作業の様子」、「衣・食・住」、「儀式」、「アート」、「子供たちの成長」、そして「文明との衝突」といったテーマごとに分類し、生活用品と共に展示する体裁をとっていた。この写真展の醍醐味はしかし、部族のメンバーが会場に居合わせながら、来場者に展示内容や取材の感想を丁寧に解説したり、会場の内外でオリジナルパフォーマンスを披露したりする点にあった。一族がまるでそのまま引っ越してきたが如く会場の各所でアットホームに過ごしていて、脇で寛ぐ一家がいれば、座談する仲間たちもあり、展示された自分たちの画像に興味深気に見入る年配や、同様の画像を前にはにかみながらじゃれ合う女子たちの姿も観られた。



画像2-2-1 ブラジリア国立博物館で開催されたヤワラピティ特別展と、これに伴って館前の広場で行われた部族パフォーマンス：「クアルupp (quarup)」と呼ばれる儀式の際に行われる「死者に捧げる舞」(左下)、及び「フカフカ (Huka-Huka)」と呼ばれる相撲レスリング (右下)。

会場外の広場ではフリーマーケットが開かれ、ヤワラピティ特有の工芸品や食材がレジャーシートの上にずらりと並べられた：七色のビーズを編んで作られたミサンガ（BRL40～120）や首飾り（BRL50～800）；「バンコ（banco）」と呼ばれるアニマルデザインの頑丈な木彫り椅子（質や大きさによりBRL500～2000）；樹木のファイバーを編んで作られたバスケットや莫塵（BRL200～600）；カラフルな羽帽子（BRL300～2500）や羽飾り（大きさにより幅があるが、平均でBRL20～120）；乾燥させたヘチマの実で作ったラトル（BRL20～40）；各種のドリームキャッチャー（BRL15～40）；森で採取した蜂蜜の瓶詰（BRL30～50）等々。どれも商品として並べられてはいるものの、日用品として用いられるものも多々あった。写真展開催期間中の早朝から陽が暮れるまで、連日この青空市では先住民の売り子とその家族たちが白人系のお客さんたちとやりとりする賑やかな光景が観られた（画像2-2-2）。

この会場で筆者は、派遣前からSNSで繋がっていた6名のインフォーマントたち（女性4名、男性2名）と実際に会って話をすることができた。中でもディーナ・ヤワラピティさん（仮名、女性、30代）との対話は貴重だった：部族工芸のプロモーターを担い、地元の大学で先住民アートの研究もやっていた彼女には、後日筆者の研究室にご足労いただいて詳しい聞き取りを行った他、彼女の若手親族たちにも進んで紹介していただき、自己表現と民族的なアイデンティティーについて色々話を伺うことができた。<sup>2</sup>

「若い人の意見もぜひ聴いておきたい」というこの時の筆者のリクエストを覚えていたディーナは、後日17歳になる息子のケニー君を伴って筆者の研究室に来てくださった（画像2-2-3）。ケニーには既にしっかりした部族としての自覚があり、『ファッションと自己表現に関するインディオの若者感覚』について投げかけた一連の質問にもテキパキと応答してくれた：当日彼が身に着けてい



画像2-2-2 博物館前で開催されていたフリーマーケットの光景。ヤワラピティ族特有のグッズ各種が陳列され、トライバルアートを求める来場者と部族の売り子たちが売買に興じていた。

2 インディオの多くは自部族の名を苗字にしているため、仮名もこれに倣って作成した。



画像2-2-3 筆者の研究室で自身の装身の意味合いにも触れながら、部族の伝統と現代的な自己表現の関係性について説明するディーナとケニー。身につけていたミサンガのデザインも、ゲニパアメリカナの果汁を使って描かれたボディペインティングの絵柄も共に個人的な描写ではなく、祖霊を表象する部族の伝統的なモチーフだと主張した。

た洋式のクールティーンなファッション（Tシャツやキャップによって構成）とトライバルなモード（ビーズのミサンガやゲニパアメリカナの果実（genipapo）から抽出した藍汁で描いたボディペインティングにより構成）の間に融合性はなく、むしろそれらを「文明社会に生きる必要性vs自民族の誇り」という対立項として捉えている点も明らかになった。ディーナがこの時添えたコメントによれば、観光客などに売る民芸品については個人的にデザインをリアレンジすることもあるが、自分たちは「そのような“偽装品”は身に纏わない！」とのことだった。

### 2.3 先住民コミュニティへの視察訪問

筆者は今回の派遣とは関係なく、北米の大学院に在籍していた頃からのよしみもあって、2018年9月現在20余の先住民ネットコミュニティに参加している。そしてブラジルに来て間もない5月中旬、これらのネットコミュニティの中でブラジルを拠点とするものに向けて地元への視察訪問のリクエストを一斉に送った。結果数ヶ所より前向きな返答があり、その内の一共同体との具体的な交渉が急ピッチで進んだため、7月の前半を通して現地視察を実施することができた。以下、守秘主義に基づきこの部族にラピュータという仮名を当て、その土地をラピュータランドと表記することにする。そして、言及する全ての部族インフォーマントにも仮名を当てながら解説を進めた。

ブラジル南部の山間に古くから狩猟と採取、そして比較的簡単な畑作を実践しながら暮らしてきたラピュータの人々は白人たちとも早くから交わり、部族の中には混血も多い。FUNAIの関係者によれば、この部族は「外界に対してオープンで、比較的交流がしやすい人々」とのことだった。ここに嫁いだアマゾン出身のアニータさん（23歳の先住民女性）がネットの部族コミュニティで広報と交流を担当し、現地でも訪問者の案内役を担っていた。そして筆者のリクエストにも快く応じ、手際よく入境手続きを進めてくださった：適切と思われる部族の代表者に繋いだり、連絡や入境に際して心得ておくべき諸点（プロトコール）を丁寧に教示して下さったりした。彼女は訪

間後も研究成果の発表に使用する公開画像の許可を部族関係者から得たり、視察の所見をまとめるに当たって内容に問題がないか詳しくチェックしたり、必要と思われる部族関連の資料を提供したりするなど、丹念な事後サポートも続けてくださっている。

現地への訪問に当たっては、アニータと彼女のご主人ホルヘが暮らすブラジル南部の某湾岸都市で合流し、そこから現地までの約250キロの道程をレンタカーで約6時間かけて走った。出発前には都市郊外の山間に設けられた円形の先住民族集会所 (maloca) にて一夜をかけた浄化儀礼を行い、若手の呪術医でもあるホルヘが祈祷師仲間のチョコを呼び寄せて誘導役を担った (画像2-3-1)。門外不出のこの儀礼体験についてここで詳しく解説できないのがとても残念だが、「喧騒な都市社会から自分を隔離して魂を洗い清める」という意味でこの通過儀礼が筆者にとって効果極まりなかった点は確かで、これを通して先住民の地への入境に伴う自分の守護霊が鳶であることも判明した。

筆者は院生時に親しく交わった北米の某沿岸部族より既に狼のトーテムを授かっていたが、今回の儀礼中に得た「鳶になって大空を悠々と舞う」幻想体験を通して「地にあっては狼、空に舞っては鳶」となる自身のシンボリックなポストチャーを悟らされた。後日より踏み込んだ解釈をホルヘから促された結果、これらの守護霊たちが共に自分の人生の要所々々で指針として現れ、「進むべき道」を示してくれるという点が確認された。

こうした浄化儀礼やこれを継承してきた先住民の暮らしぶりに触れてつくづく感じるののは、「文明社会」という自世界の今様な醜態である。それは「発展 (progress)」という名の下に量・質共過剰な生産を促し、そのために自然界を破壊し尽し、著しい社会格差をもたらして尚「景気」といった場当たりで胡散臭い金利指数を掲げて利潤の追求に明け暮れる資産家とそのフォロワーたちが



画像2-3-1 ラピュータランドへの入境に備えて浄化儀礼を受ける筆者。これを通して、先住民族世界における自分の守護霊が鳶であることを悟った。

編み出すタックスヘイヴンな利権マトリックスを軸に据えた新保守主義的な運営秩序が放つ悪臭でもある。利潤展開装置を保守するためには多様性もデモクラシーも、福利厚生も労働条件も、憲法も基本的人権も、そして人の命でさえたやすくそっちのけにしてしまうキャピタリズムの末法秩序が至極理不尽なことを重々承知しておきながら、その中で自分を紛らわし、虚構化された「安心で安全な日常」を何も変えようとしないうまま「楽に生きよう」とする己の「墮落し切った魂」を、件の儀式は一時的にも外界に投棄し、これを戒めるかけ替えない機会を与えてくれたのである。

ホルへの助言によれば、現代の文明世界にはケミカル中毒が蔓延し、そこに生きる人々は取り締まりのための司法や統制のための倫理道徳によって雁字搦めに縛りつけられ、金ありきの自分の居場所しか確保できない。そこでは狡賢い白豪商売人とこれに靡く嘘つき政治家ばかりがのさばっていて、あらゆる価値観が株価に置き換えられてしまう。この西欧化され切った世界を解脱し、自分の命と真剣に向き合い、人間としての存在意義について深く考え直さなければ、この世界全体が消滅してしまうだろう。今回の筆者の入境は、一人でも多くの非先住民にこのことを理解してもらう格好の機会になるということだった。太古の昔より様々な命を育ててきた大地や森にしっかりと根を張り、自分たちの手で日々の営みに必要な最低限のものを作って生活環境を整え、素朴ながらも逞しくバランスのとれたエコライフを持続させながら「祖先（過去）と子孫（未来）を橋づけるリニエッジと伝統文化」を編み出してきたインディオの精霊に導かれ、筆者は「人間的に正しい道」を自らに問い直す旅に出たのである。

こうしてラピュータランドに入った筆者は先ず、ホルへの祖母宅に向かった。世話になる親族の長に一箱分の食料を持参するのが入境の折にゲストに求められる作法であり、帰省するメンバーもまたこれに従うと予め聞かされていたので、筆者も村の最寄りのスーパーに立ち寄って買い込んだソーセージやパンや、瓶入りの飲料を持参した。領内に至り、時折車のヘッドライトに照らし出されるバラック小屋を横目に、林間に切り開かれた砂利道を暫し進むと、素朴で閑静なその佇まいは現れた。中にお邪魔すると、80を疾うに越えた貫禄のある老婆が毛糸で編まれたセーターにその身を包んでキッチンの奥に座り、皺だらけの顔に刻まれた細い目でこちらを見つめながら暖をとっていた。絵になるようなその光景を眺める筆者を後ろに、孫のホルヘが老婆に歩み寄って彼女を優しく抱擁した。筆者のことが紹介され、握手を交わすべく手を差し伸べると、老婆は頷きながらその手を彼女の暖かい両手で包み込んでくださった。

老婆の傍にあった鉄製の暖炉は薪をくべて加熱する昔ながらの様式で、その上には煙を上げるクッキングポットやケトルが置かれていて、松の実や黒豆やマンジョーカの塩茹が食欲をそそる匂いを放っていた。皿にこれらの御馳走を盛りつけ持参したソーセージをこの暖炉の脇で焼きながら、居合わせた親族と共におぼあを囲んで雑談をしていると、我々の到着を聞きつけた他の親族メンバーも次々に集まってきた。皆満面の笑みを浮かべ、懐かしそうな表情でホルヘ及びアニータと抱擁し合って挨拶を交わした後、物珍しそうに筆者を眺めながら恐る恐る会話を持ちかけてきた。こうして集った12名程の親族を前に、筆者はアイスブレイキングを促し信頼を勝ちとることに専念しながら、交互に投げかけられる質問に極力真摯な対応を披露できるよう努めた。長い口頭試問のよう

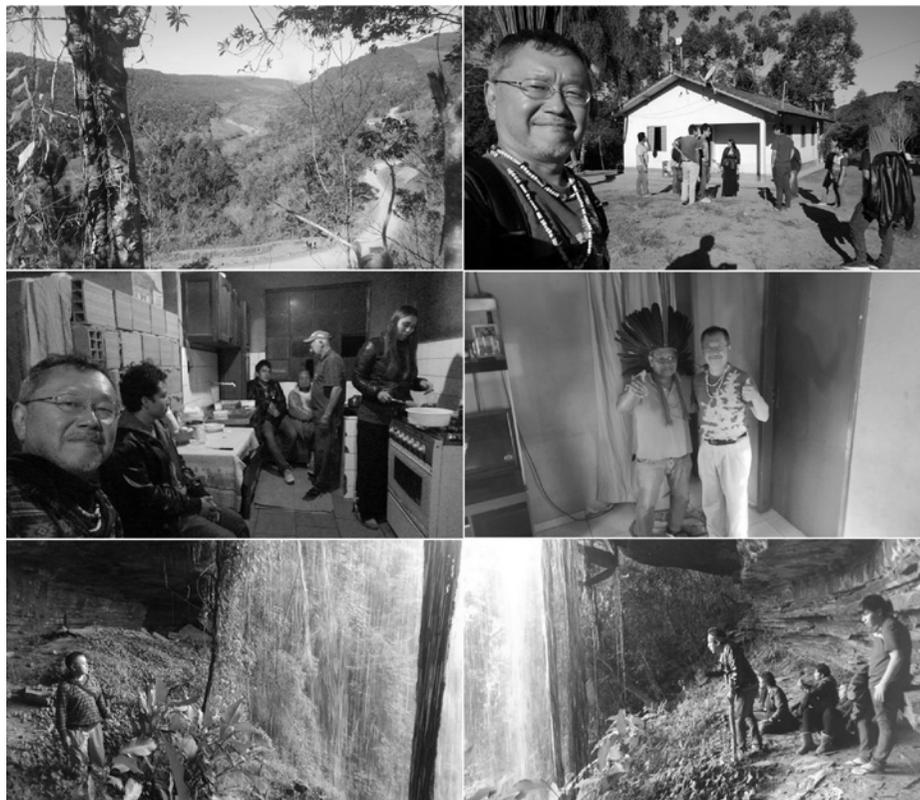
な時間が流れて夜も更け、やがて親族間の協議を経て、手を挙げてくださったホルへの伯父宅に泊めていただくことになった。

砂埃に塗れた自家用車やオートバイ、あるいは伐採された木材を目一杯積み込んだ運搬用のトラックが排ガス交じりの噴煙を上げながら時折通り過ぎる砂利道を伝い、筆者はホルへに導かれるがまま、同行者たちと共に朝にラピュータランド内の聖地や施設を巡り、夕べに親族宅での懇親やキャンプファイヤーを囲んでの懇談を楽しんだ。マイナスイオンを沢山吸い込み、絡みついてくる蔦や草木を掻き分けながら、道なき道を進んで漸く辿り着いた聖地は、滝を仰ぐ洞窟だったり清水に満たされたラグーンだったりした。部族の祖先が暮らした痕跡がむき出しになった場所もあり、ホルへがこれらの地にまつわる伝説など、知り得る限りのことを丁寧に解説してくれた。脊柱管狭窄症のため長距離歩行が困難な筆者だったが、十分な時間をかけ、途中で何度も休んだり同行者の手を借りたりしながら、これらの場所を堪能して回った(画像2-3-2)。

先のテラ・リヴレの個所でも述べた通り、ブラジル先住民の多くは白人系の地主や業者、あるいは政府主導の公共事業による乱開発によって移住を余儀なくされたり、入植によって疫病をもたらされながら適切な治療を受けられないまま部族の大半を失ったりするといった受難体験を持つ。かつてインディオたちが暮らしていた広大な自然森や、あのアマゾニアに代表されるような湿地帯は、大農園 (latifundio) の拡大に伴う開墾によって見るも無残に破壊されてきた。こうした状況に対処する形で、1960年以降ブラジル政府によってインディオの居留地が次第に区画づけられ、法務局によって度重なる保護区域の制定宣言がなされてきた。1988年に更新されたブラジル連邦共和国の憲法もインディオの権利の保護を人種差別の禁止と共に明記している。<sup>3</sup>しかし今でも違法業者による採掘や伐採が各所で続き、川沿いでは魚を密猟する業者との抗争も絶えることがなく、公共事業でさえ必ずしもインディオの了解を得て行われるとは限らない。<sup>4</sup>ラピュータランドでもこうした抗争によって数年前に多くの命が奪われ、ホルへ自身も命辛々都市部に避難してきたという。筆者がラピュータランドを離れる前夜、件の伯父宅の庭先で丸太を集め、若手の親族とその親友ら9名を集めて行ったキャンプファイヤーの席でもこの時の話が持ち上がり、普段は物静かで優しい伯父もこの時ばかりは怒りを露わにして声を張り上げながら、生々しい抗争の様子を解説してくださった。

3 ブラジル政府によるインディオ保護政策とその歴史的背景、及び新憲法におけるインディオの権利保障に関しては今泉(1994)を参照のこと。

4 先住民や環境保護活動家の多くがこうした抗争で命を落としてきた。中でもアマゾンの乱開発に反対するキャンペーンを指導していたフランシスコ・メンデス(1944-1988)の暗殺は有名である。彼はゴムノキの生える熱帯雨林の牧草地化を企てていた大土地所有者や牧畜業者に強く抗議し、ゴムの樹液採取人たちからなる組合を結成して政府に働きかけていたが、ブラジル西部のアクレ州でピストロの銃弾に倒れた。イギリスのミュージシャンで元ビートルズのメンバーとして知られるポール・マッカートニーは、彼の死を悼んで賛歌『How Many People』を翌年(1989)発表し、同じくイギリス出身の歌手で元ボリスのヴォーカリストでもあったスティングは同年、活動家のジャン・ピュール・デュティール及びアマゾニアを代表するカヤボ族の大酋長ラオーニと共に『熱帯雨林救済ツアー(Save the Rain Forest Tour)』と銘打った国際キャンペーンを展開している。



画像2-3-2 豊かな森が広がるラピュータランドにて：ホルへの親族と親交を深め、聖地にも案内された。

最終日に村を出る際、ホルへは彼が慕う呪術医の恩師ニーナさんの所へ筆者を案内してくれた(画像2-3-3)。拝謁した90歳にもなる老婆は、部族が20世紀初頭に初めて接触した白人(個人)の直系の孫だというご主人と共に仲睦まじく山中に開かれた農家の中庭で長椅子に腰かけ、集めた植物の種を整理していた。筆者を温かく迎えるや、老婆は集めた種に糸を通して作ったネックレスや、乾燥させたヘチマの実に鳥の羽をあしらって作った儀式用のラトルを持ち出してきて見せてくださった。するとこれをフォローするようにご主人が自作の弓矢を出してきて買わないかと迫った。日本では銃刀法が厳しいので持ち帰れないと丁重に断ると、日本にはサムライ文化があって弓矢も使うと聞き及んでいるので、ぜひ試してみろとご主人：果たして10メートル程先の松の木を標的に見立て、居合わせたチコと弓の腕試しに興じるようになった。

弓道には無縁な筆者も日本で使う典型的な弓の形や引き方くらいは心得ているつもりだったが、ラピュータの弓術とはかなり異なっていた。森中での狩猟に適した部族の弓は小柄で、立引きはせず、身体を前屈みにして横目に引く技を要した。昔は矢に毒を塗り、獲物は一撃で仕留めようとはせず、毒が全身に回って動けなくなるのを待ちながら何時間も(時には何日間も)森の中を追跡したのだそうだ。そんな解説をしながら、散々な競技結果の末疲れ果てた二人を前にご主人が引き放った矢は、一発で見事に松の木に命中した。



画像2-3-3 年配呪術師のニーナさんを訪ねた折：種ビーズを編んで作ったネックレスやご主人が作成した弓矢を拝見し（上段）、部族間に代々わる『シード・ストーリー』を聴かせていただいた上（左下）、食卓を囲んで雑談を楽しんだ（右下）。

長椅子に腰かけて細目にじっと様子を窺っていたニーナさんは筆者を呼び寄せ、一緒に座るよう求めた。そして大切なストーリーを聴かせたいと切り出し、ラピュータの言葉で語り始めた。ホルへの葡訳と同行していたニタハラ＝ソウザ氏の英訳に助けられながら、先祖から受け継がれ然るべき人にしか語られないとされるそのトライバルストーリーに筆者は聴き入った：それは大自然と調和し、森が育む命を大切にしながらこの地に暮らしてきた祖先が子々孫々に託した『種の話』で、「健康な種が再生される限りにおいて世界は調和を保つ」という教訓を秘めていた。白人と初めて接触した折にも「友情の証」として種を交換し合ったということで、次に筆者がこの地を訪れる際には自分の土地の健康な種を持参し、交換するよう求められた。そして必ず種を持って戻ってくるよう再三念を押された。部族を代表する年配の呪術師からの有難いお誘いはとても嬉しかったが、『近年中の再来と種の交換』という大きな課題を与えられて内心戸惑っている次第だ。

庭先でこのような時が流れている間、調理場ではニーナさんの孫嫁に当たるユリさんがその娘さんたちと共に、私たちが差し入れた小振りな鯰（十数尾分）を使ってフライと煮つけを作ってくださっていた。この鯰は、道中に立ち寄った湖畔で漁師から直接買い受けた鮮魚たちだったのだ。そして昼食時には皆で食卓を囲み、炊いた白米と豆とマンジョーカを添えたこの鯰の煮つけとフライに舌鼓を打ちながら、雑談に華を咲かせた。日本のことも色々尋ねられ、同席していたニーナさんの曾孫たちには平仮名と片仮名を書いて示しながら、日本語の基礎について説明して進めた。すると皆とても興味深げに聴き入った挙句、挨拶の仕方や自分たちに馴染みの深い言葉を矢継ぎ早に和訳するよう求められ、筆者はなかなか食事を喉に通すことができなかった。

### 3. ブラジリア大学における活動

上記した三つの体験が筆者にとってかけ替ええないものとなったことに疑いの余地はないが、それらはブラジリア入りを果たして以来得ることができた数々の有意義な見聞の中の一握りに過ぎないこともまた確かである。これらの事柄を省みながらフィールドノートをまとめ、ワークショップを発起して成果の一部を発表し、学術的なフィードバックを得ながらデータの再解釈を行う場を設けることもまたフィールドワークには欠かせない業務であるが、ブラジリア大学人類学部における筆者のアフィリエーションがこの部分を少なからず満たしてくれている。

当学部では、筆者の世話人を務めてくださっているスティーヴン・ベインズ教授（ブラジルをはじめとする先住民族文化の研究が専門）の強力なバックアップを得て、彼が主催する間民族関係研究センター（Laboratório e Grupo de Estudos em Relações Interétnicas [LAGERI]）で定期的に行われる発表会やワークショップ、あるいは懇談会に参加させていただき、そこで知己を得た先住民の院生たちも交えて現地調査の成果を吟味させていただいている。6月29日に筆者が『Reinventando o Loochoo : como os jovens de Okinawa praticam o hibridismo cultural para vitalizar sua identidade étnica（琉球モードの再構築—若手うちなんちゅによる文化的ハイブリディティの実践と自民族アイデンティティの活性化）』と題してこのLAGERIで行った発表では、それまでの現地調査から得られた見解を沖縄で積み上げてきた視点と比較しながら話を進め、来場した12名の先生方と「現代における民族性の捉え方」について生産的な議論を交わすこともできた（画像3-1）。そして2018年11月現在、シンガー川流域の先住民訪問を控えた筆者は、ベインズ教授及び先



画像3-1 ブラジリア大学人類学部の間民族関係研究センター（LAGERI）にて、研究者の仲間たちと。

住民の同僚たちと共同で行うワークショップの準備を進めている他、共著の刊行に向けて執筆を進めてもいる。

一方、同じ人類学部のファカルティーメンバーでトランスナショナルな資本主義の研究で知られるグスタヴォ・リヴェロ教授の依頼を受け、彼が開講した『Antropolgias Mundiais (世界の人類学)』講座にも参加させていただいている。この講座では「先住民の声と視点」をとり入れた文化解釈を念頭に、民族誌のあり方について履修生たちと議論を重ねている次第だ。この中で筆者が担当するゲストレクチャーにおいては「コスモポリタンな世界における民族性の意味は何か?」、「ネオコロニアリズムと資本主義と民族性の関係性はどのようなものか?」、あるいは「文化人類学は民族についてどこまで思考し得るのか?」といった問題をこれまでに提起し、学生たちと活発な意見交換をすることもでき、現在各々の発見をレポートにまとめてもらっている所である。

この他大学では、先住民学生センター（通称Maloca）で先述のディア・ド・インディオに合わせて行われたキャンパス先住民大会や、同センターと人類学部が共催した懇親会にも参加させていただいた（画像3-2）。そして学生たちは勿論のこと、キャンパス内外の先住民研究者や学部出



画像3-2 人脈各種：先住民の日、テラ・リヴレに呼応してブラジル大学キャンパスの先住民学生センター（通称Maloca）で開かれた学生大会のオープニングセレモニー（上段右）、及び参加者たちとのショット（上段左）；アルシーダ・ラモス名誉教授と（中段左）；ヤワラピティ写真展にて作品を手がけたジョアン・ボエルズ氏と（中段右）；国立先住民保護財団（FUNAI）及び土地なし農村労働者運動（Movimento dos Trabalhadores Sem-Teto [MST]）の関係者たちと（下段）。

身のFUNAI関係者との対話を楽しみ、親交を深めることもできている。この中でもインディオ研究の大御所で、ブラジリア大学の名誉教授でもいらっしゃるアルシーダ・リータ・ラモス先生との親交は筆者にとって特別な意味を持ち、快くラフにおつき合いくださる彼女とは〈民族学の将来〉や〈人文社会科学のあり方〉、あるいは〈人類のこれから〉に関して、気軽ながらも広く深く議論を交わしながら、不定期的に時間の共有を楽しませていただいている（画像3-2中段左側）。

#### 4. 結びに代えて

斯々云々、平成30年度長期海外特別研究派遣として筆者が授かったブラジル滞在は、大学及び先住民関係者各位からの多大なサポートを得ながら、無駄なくこれを満たすことができているように思う。研究課題に直結した上記の活動以外にも、三ヶ月間有効な観光ヴィザを得て沖縄から一時的に呼び寄せた家族を伴って110周年を迎えたサン・パウロの琉系及び日系の各移民コミュニティを訪ね、現地在住の親族と懇親を深めたり、サン・パウロ郊外にある貧民街に無償の全人教育学校や自然農法を取り入れた農場、そして福祉医療施設を訪ねてボランティア活動をさせていただいたりした（画像4-1）。



画像4-1 休暇訪問各所：サン・ミゲル・ダス・ミソニスのイエズス会对グアラニー教会遺跡にて（上段左）；イグアスの滝を望んで（上段右）；サン・パウロ郊外にある貧民街 (favela) に佇む自由学校施設（中段左）；自由学校に通う子供たちと（中段右）；サン・パウロの日本移民資料館にて（下段左）；サン・パウロで開催された第16回沖縄祭の風景（下段右）。

一方、大農園が地平を埋め尽くすリオグランデ・ド・スル州の北西部に先住民の愛友らと共に向かい、イエズス会の対グアラニー族伝道所として18世紀前半に栄えたサン・ミゲル・ダス・ミソニス (São Miguel das Missões no Rio Grande do Sul) の遺跡群を観て回ることもできた (画像4-1)。更に、乾季が終わる10月末のアマゾニアでは、インディオ博物館 (Museo do Indio) を訪ねて熱帯雨林や現地先住民ライフの現状と関連の保護活動について詳しく学んだり、エコツアーに参加して現地の先住民保護区や森林を見学して回ったりした。またマナウスやポンタ・ネグラといったアマゾン川流域の都市にも立ち寄り、著しい開発を目の当たりにすることもできた (画像4-2)。

総じて、筆者にとって今回授かった特別研究派遣が持つ意義はとて大きく、今のところ時間を無駄にすることなく、新たな知的領域の開拓と学術ネットワークの構築が行えているように思う。こうした機会が賜れたことに心から感謝していることはいうまでもなく、帰国後はここで得た経験を極力活かしながら、本学における人智学的な場作りと学生たちの学際的な育成 (cultivo antropológico) に益々貢献して参りたいと考えている。



画像4-2 アマゾニアへの旅より：開発の進むマナウスの港 (上段左)；先住民の民芸アウトレットにて (上段右)；アマゾン川支流の先住民村にて (中段)；小型客船でリオ・ネグロを上る筆者 (下段左)；エコパークにてナマケモノに癒される筆者 (下段右)。

## 参考文献

- ・ Commaroff, Jean, and Commaroff, John (eds.) (1993). Modernity and Its Malcontents : Ritual Power in Postcolonial Africa. Chicago : University of Chicago Press.
- ・ ----- (eds.) (2009). Ethnic, Inc. Chicago : University of Chicago Press.
- ・ Hutchinson, Sharon (1996). Nuer Dilemmas : Coping with Money, War and the State. Berkeley : University of California Press.
- ・ 今泉愼也 (1994). ‘ブラジルインディオの法的保護’. 矢谷通朗、ワタナベ・カズオ、二宮正人 (編), 『ブラジル開発法の諸相』. アジア経済研究所, Pp. 367-379所収.

## 参照URL

- ・ Mobilização Nacional Indígena (MNI), <https://mobilizacaonacionalindigena.wordpress.com/2018/04/26/documento-final-do-acampamento-terra-livre-2018-o-nosso-clamor-contra-o-genocidio-dos-nossos-povos/>
- ・ Articulação dos PovosIndígenas do Brasil (APIB), <http://apib.info/2018/04/12/programacao-do-acampamento-terra-livre-2018/>